前略、

初めてお手紙さし上げます。

先生の著書「平穏死という親孝行」を読ませて頂きました。

私事ですが、7月初めに父が他界しました。

3年程前に熱中症で倒れてから復活しましたが、だんだん食べられなくなり、この5月ぐらいから元気がなくなりました。

そして6月、39度の熱を出し、救急車で大学病院へ運ばれ入院。

入院して3日程してから意識は戻りましたが、全く食べないので、筋肉が落ちて立てなくなりました。先生の本と父の体力をみて寿命が近いかな、と思い、●●●で看取りもやっていただける在宅医を探し、元気な頃に利用していたケアマネに頼み訪問看護師さんを探し、ベッド、車いす、ポータブルトイレ、吸引器などを全部そろえて大学病院を強行退院。早めに動いたつもりでも父の入院から3週間が経っていました。

入院中、私の顔を見るたび、「帰りたい」しか言わなかった父、その願いを叶えてあげることが出来ました。

自宅に戻ってからは点滴を外したので、食べない父はみるみるやせていきました。それでもお茶が欲しい時は「お茶」と言いましたし、ごはんも要らない時は首を横にふって口を開けようとはしません。家族は「父の思うように」と一貫した態度で接していたので、よかったと思います。

父は、病気といえば、前立腺肥大症と、パーキンソン病、認知症で、命にかかわる病気ではなかったのですが、自宅に戻ってから尿カテーテルに血液がたまり、(というか出血したので)在宅医を呼んで、診ていただきました。在宅医は家族の思いを確認して「点滴をすると自然ではなくなりますが、用意はしてあるので、出来ますが、どうしますか?」と聞いて下さり、父にとっても家族にとってもいい方法、「膀胱洗浄」のみして下さいました。

そしてその3日後の朝、息を引き取りました。

大好きな自宅で、ラジオを聴きながら本当に楽な最期でした。

体の水分という水分、使って死んでいくんだっていうことが実感でき、舌の縮み、後頭部の赤いはん点、骨のぶつぶつ、体をもって色々教えてもらいました。

「せん妄」といわれる体の動きも、昔から父がよくやっていた動きだったため、これが、という感じではなく、亡くなってから、あれが せん妄だったんだと認識しました。

発熱も、37.5℃ぐらいでしたし、亡くなる3日前から声が出なくなり会話は、耳元で話す時に父のほほにふれるので表情筋の動きで確認、亡くなる前日まで、出来ていました。

父は入院で、自然死だったので、火葬も予定より20分も早く終わりました。自然に逝くということは地球にとっても優しいことなんですね。

先生の本に出会って父を自宅で看取ることが出来て本当によかったと思っています。7日間、自宅で父とゆっくり過ごせたことで母も色々考えるきっかけになりました。

これからの先生のご活躍、陰ながら応援しています。

かしこ